

研究ノート

長島愛生園を訪れた人々ー昭和 6 年から昭和 19 年までー

People who visited National Sanatorium

Nagashima-Aiseien: from 1931 to 1944

山根 (吉長) 智恵¹⁾

Chie Yamane-Yoshinaga

キーワード : ハンセン病、隔離、言語接触、言語生活

Keywords : Hansen's disease, quarantine of the patients, language contact, language behavior

1. はじめに

日本におけるハンセン病患者⁽¹⁾は、長年続いた隔離政策の間、収容された園から外出することが、親の通夜への列席など特別な場合を除き、困難だったと言われている。一方、戦後 1947 (昭和 22) 年頃から特效薬のプロミンが使用されるようになり、治癒が可能になる以前においても、療養所を訪問することは難しくなかったようで、たとえば全国初の国立らい療養所である長島愛生園⁽²⁾の園誌『愛生』には、多くの訪問者があったことが記されている。筆者の研究課題である「ハンセン病療養所入所者の言語生活」は、隔離された中で生活を送ってきた入所者の言語生活を調査・分析することであるが、入所者の言語使用状況や方言の認知度は、訪問者との交流の有無、つまり訪問者との言語接触の頻度によっても異なるのではないかと思われる。

本稿では、長島愛生園を例に、療養所がどのような訪問者を受け入れていたのかについて、開園から終戦までに発行された園誌『愛生』の「愛生日誌」を分析することで、患者の言語接触の状況について考察する⁽³⁾。

2. 隔離の歴史⁽⁴⁾

長らく遺伝病だと信じられてきた「ハンセン病」⁽⁵⁾は、1873 (明治 6) 年にノルウェー

¹⁾ 山陽学園大学総合人間学部言語文化学科

のハンセンが「らい菌」を発見したことから、感染症であることが明らかとなる。しかし、その伝染性がそれほど強くないことを、当時の医療関係者の中には知っている者もいたようである。ただし、当時有効な治療法がない伝染病であり、神社などで浮浪する患者を取り締まる意味からも、政府は1907（明治40）年、「らい予防に関する件」という法律を施行し、療養所への収容・隔離を開始した。それらのうち、最初の国立療養所が、1930（昭和5）年に岡山県長島に誕生した長島愛生園である。

1931（昭和6）年、初代園長・光田健輔が85名の患者^⑥と共に長島愛生園にやって来るが、その後、ハンセン病患者を県からなくするという「無らい県運動」が盛んになるに連れ、収容人数は増加していく。当初の400名定員もまたたく間に埋まり、最も多い1943（昭和18）年3月末の統計では、2017名（男性1396名、女性621名）に及んでいる。そして、患者のための十坪住宅^⑦も1932（昭和7）年から建設されるようになり、その数は、1944（昭和19）年には143棟、1047坪にまで増築されることになるのである。

3. 訪問者の在住地域

それでは、訪問者はどのような地域から長島愛生園に足を運んだのであろうか。訪問者を在住地域別にまとめたものが、以下の表1^⑧である。

年	岡山	近畿	関東	四国	九州	中国	中部	東北	北海道	海外	その他	合計
1931	5			2						3	7	17
1932	30	13	8			1	1			7	36	96
1933	25	6	3	1				1	1	9	21	67
1934	77	24	12	6	2	4	3		1	19	51	199
1935	102	28	20	6	5	2	1	1		24	52	241
1936	88	20	15	10	9	6	9	1		15	33	206
1937	88	36	12	7	3	14	6	3		14	49	232
1938	60	38	15	12	7	21	8	1	1	20	78	261
1939	76	43	19	3	9	8	6	2		18	109	293
1940	42	22	17	6	12	2	3	2		11	78	195
1941	57	21	18	14	10	6	5	2		11	93	237
1942	47	19	18	10	10	1	7	5		16	89	222
1943	73	49	21	12	10	9	8	2		19	81	284
1944	34	22	7	6	6	3	5			6	62	151
合計	804	341	185	95	83	77	62	20	3	192	839	2701
注1	「中国」：岡山県を除く中国4県											
注2	「海外」：外国人及び海外在住の日本人											
注3	「その他」：在住地域不明											

まず、在住地域が不明な訪問者を示す「その他」を除けば、長島愛生園の所在地である岡山県からの訪問者が804、29.8%と全体の3割を占めていることがわかる。次に多いのが近畿地方からの訪問者で341、12.6%、以下、海外192、7.1%、関東地方185、6.9%、四国地方95、3.5%、九州地方83、3.1%、中国地方77、2.9%、中部地方62、2.3%、東北地方20、0.7%、北海道地方3、0.1%と続く。

ここから、地元岡山県からの訪問者が多いことに加え、岡山県に近い西日本からの訪問者が多いことが見て取れる。新幹線や飛行機での往来が不可能な時代、距離的に近い地域からの訪問者が多いことは納得できる。その中で、関東地方からの訪問者が近畿地方に次ぐという事実は、首都であり、人口の多い東京からの訪問者が多いからである。また、中部地方からの 62 の訪問者のうち 42 (67.7%) は、無らい県運動が盛んだった愛知県からである。さらに、それほど岡山県からの距離が変わらない沖縄と北海道であるが、沖縄からの訪問者は 13 で、北海道の 4 倍にあたる。これは、ハンセン病が気温の低い地域よりも高い地域に発生しやすかったこと、沖縄にハンセン病療養所があったためである。なお、「海外」に含まれる日本在住の外国人の大半はキリスト教の宣教師で、ここでは「海外」に含めているが、岡山県に在住していた者がほとんどである。

結果、訪問者のほぼ半数が岡山県と近畿地方で占められることから、患者との言語接触があったとしても、共通語以外に耳にした方言としては、岡山方言と近畿地方の方言が大半であったと推察される。

4. 訪問者の所属機関・訪問目的

では、訪問者にはどのような職業の人が多く、また訪問目的はどのようなものであったのだろうか。本章では、訪問者の所属機関（職業）または訪問目的を、①学校（教授、教員、学生、生徒、児童など）、②宗教団体（神父、牧師、僧、宮司など）、③ハンセン病療養所（療養所の医師、職員など）、④官公庁・研究所・ハンセン病関連機関（内務省・厚生省の職員、県の衛生課職員、村長、町会議員、警官、技師、MTL 職員⁽⁹⁾、衛生組合職員、方面委員⁽¹⁰⁾など）、⑤マスコミ（新聞社・放送局の社員など）、⑥短歌・俳句・詩の会（指導者など）、⑦軍（軍病院の医師、職員、軍人、軍事講話者など）、⑧医療機関（医師、看護師、事務職員など）、⑨慰問（浪花節、楽器演奏関係者など）、⑩その他（婦人会、青年団、スポーツチーム関係者など）に分け、その数を以下の表 2 にまとめる⁽¹¹⁾。

表 2 から見て取れるのは、まず、宗教関係者が 699、25.7%と最も多いことである。これは布教や宗教行事催行のためで、特にキリスト教関係者と仏教関係者が突出している。キリスト教関係者は外国人宣教師が多く、上述のようにそれらの多くは地元の岡山県に在住していたが、僧侶についても岡山県在住者が多い。それ以外では、近畿地方や四国の高松などから布教や講話のため来訪している場合もある。

次に多いのが官公庁からの訪問者で、584、21.6%を占める。療養所関係者 266、9.9%と合わせると、850、31.5%に上り、最も多い数となる。官公庁からの訪問者は、政府機関が集中している東京、近隣の市町村、岡山県、近畿・中国・四国地方、愛知県が多く、遠方からの来訪は少ない。一方、療養所については、東北、沖縄など遠方からの訪問者もあり、さらには朝鮮の更生園、台湾の楽生院、満州の同康院など、海外の療養所に勤務する者も含まれる。ここから、いわゆる視察の意味合いが強い訪問も多かったことがうかがえる。

第 3 は学校関係で、269、10.0%である。割合で多いのは大学・専門学校関係者（教員・学生）で、岡山県だけでなく近畿、東京、さらには東北、九州、北海道からも訪問しており、特に医学関係の訪問者が多い。また、慰問を兼ねた小学校児童の訪問も 21 に及ぶ。特に長島愛生園に近い裳掛小学校の 12 回の訪問が突出しており、学芸会やマスゲームを

行っている。

年	学校	宗教	療養所	官公庁	マスコミ	短歌	軍	医療	慰問	その他	合計
1931		6	2	2	1				3	3	17
1932	10	30	6	12	1			2	5	30	96
1933	6	20	3	5	1			2	10	20	67
1934	19	59	17	26	4	5		1	22	46	199
1935	16	70	27	38	7	6	5	2	24	46	241
1936	14	50	20	47	6	6	1	1	21	40	206
1937	16	69	13	62	8	5	2	2	14	41	232
1938	15	59	30	77	12	4	6	3	10	45	261
1939	32	65	28	61	10	5	6	7	22	57	293
1940	20	58	27	36	1	6	8		13	26	195
1941	32	61	22	42	1	6	9	3	18	43	237
1942	21	66	30	48		3	6	6	11	31	222
1943	49	62	31	85		3	4	7	11	32	284
1944	19	24	10	43	1			3	9	42	151
合計	269	699	266	584	53	49	47	39	193	502	2701

それ以外では、193、7.1%の慰問関係者、49、1.8%の短歌・俳句・詩などの創作指導者がいる。創作指導者は岡山県、あるいは近隣の県から訪問しているようだが、慰問関係者は県外も多く、有名人では、辻久子、宝塚少女歌劇団も訪れている。またここでは「その他」に含めているが、「童話」として巖谷小波の名前も見られる。

ところで、39、1.4%に止まっている医療関係者だが、これは医学部関係者（教授・学生など）を「学校」に含めていること、官公庁や療養所に勤務している医師や看護婦を「官公庁」に含めていることが一因であると考えられる。

5. 訪問者と患者との接触

訪問者の中には、小学生のような、感染症に対して免疫力が強くない訪問者も存在するが、それでは訪問者と患者は、どの程度交流があったと考えられるであろうか。本章では、おもに現山陽女子高等学校の前身、山陽高等女学校の長島愛生園訪問を例に考察する。

校長・上代淑が、岡山県婦人会の一員としてたびたび長島愛生園を慰問していたこともあり、山陽高等女学校は、創立50周年記念事業として十坪住宅「山陽高女寮」を寄付する。その落成式が1936（昭和11）年10月24日に長島愛生園で行われることになり、女学校側からは校長、教員、同窓生、生徒合わせて160余名が出席する。この様子が、生徒の作文という形で、同窓会誌『みさを』93号に記されている⁽¹²⁾。

これによれば、女学校の生徒は園内の見学により、青年たちがキャッチボールをしている姿を目にしている。また、園内の広場で行われた落成式には、未感染児童数十名も出席している。さらに、講堂（礼拝堂）に入った際には、集う千余名の患者と場を同じくしている。そして講堂（礼拝堂）で、上代校長の話の後、皇太后の作品である短歌を患者と唱和したり、患者が歌う園歌を聞いたりしている。ここから、園を訪問した際、講堂（礼拝堂）のような場所で、患者と同じ空気を共有することはあったとしても、近距離で話をし

たり、触れ合ったりという体験はなされなかったことが明らかである⁽¹³⁾。

また、山陽女子高校には、この落成式に出席した生徒のインタビュービデオ⁽¹⁴⁾も残っているが、彼女の話からも、園内を歩く際、患者と彼女たちとの間には、道幅ほどの距離があり、間近で交流することはなかったということである。

これらの例から推察すると、おそらく裳掛小学校の児童たちについても、直接接触はせず、距離を置いての学芸会、マスゲームの披露であったと思われる。

それでは、特効薬のない時代に、なぜこれほどの人たちが長島愛生園を訪れたのであろうか。

上述の彼女の話によれば、『怖いから行かない』と参加しない生徒もいたが、生徒会でなんとなく盛り上がり、行ってみようかという生徒が参加した。保護者からの反対の声は聞かれなかった」ということである。つまり、参加するかしないかは生徒個人に委ねられ、保護者も生徒の意見を認めて送り出していたのである。彼女自身は父親が医者で、当時患者が父のもとに診察に来ていたこと、その父から「うつらない。遺伝もしない。ただ治療法がわからないだけだ」と聞いていたことから、参加を決めたそうである。

このインタビューや訪問者の数から見ても、感染力の弱さは医者や教員、また官公庁の職員など、当時の知識人には認知されていたと思われる。そしてそれが、多くの人たちが訪れる一因となったのであろう。とは言っても、上述の例では、患者と訪問者の距離はあくまで遠く、言葉を交わすことは難しかったと思われる。しかし、野球の対抗戦、短歌・俳句・詩の指導は、言葉なくして行うことは不可能である。訪問者の数に比べ、言語接触の比率は低いといえ、隔離によって園外の人との言語接触の可能性がまったく絶えたわけではなかったことが、今回の資料分析で明らかになった。

6. まとめと今後の課題

本稿では、戦前に発刊された園誌『愛生』を基に、訪問者と患者の言語接触の可能性について考察した。今後は、現在インタビュー調査を行っている入所者に、戦後の入所者が多いことから、戦後の『愛生』の分析を行いたい。また、患者・入所者の出身地についても分析する予定である。そして、それらの結果とインタビュー調査の結果を総合して、入所者の言語生活を明らかにしていきたいと考えている。

付記

本稿は、科学研究費（挑戦萌芽）「ハンセン病療養所入所者の言語生活」（26580085）の研究成果の一部である。

謝辞

本稿執筆にあたり、長島愛生園関係者、山陽女子中学校・高等学校関係者には、資料収集の際、大変お世話になりました。記して御礼申し上げます。

注

(1)本稿では、基本的に、治癒していない（菌を保持している）人を「患者」、治癒した（菌を保持していない）人を「入所者」とする。

- (2)当時の住所は岡山県邑久郡裳掛村であった。現在の住所は、岡山県瀬戸内市邑久町虫明 6539 番地である。
- (3)1931（昭和 6）年 10 月に発行された通巻 1 号から、1944（昭和 19）年 7 月に発行された通巻 122 号までを分析する。なお、1944（昭和 19）年 8 月以降、1947（昭和 22）年 2 月 1 日に復刊されるまで、『愛生』は休刊となっている。
- (4)本章については、谷川修・大竹章・成田稔編著（2002）、岡山県ハンセン病問題関連史料調査委員会ハンセン病問題関連史料調査専門員編（2007）、園誌『愛生』などを参考に、簡単にまとめた。
- (5)当時は「らい病」と呼ばれていた。
- (6)81 名は東京の全生園から連れてきた患者である。
- (7)民間の寄付金によって建設された。阿部（2006）に、代表的なものは 6 畳 2 間の部屋で、その他、廊下や板間、お勝手、トイレなどがあって、と記されている。
- (8)「愛生日誌」には、「8 月 1 日 県下西大寺町有志 9 名参観」のように、日にちごとに訪問者が記されている。よって、同日に同地方から来ている場合、複数名であっても「1」と数えている。また、訪問者については、『愛生』に在住地域が記されている者と記されていない者がいる。記されていない訪問者で、本稿執筆段階で判明した者については各地方に含めているが、そうでない者については、「その他」に含めている。よって、今後の調査で在住地域が判明した場合、表 1 の数字に変更が生じる可能性がある。
- (9)「MTL (The Mission to Lepers 救らい協会)」は、ハンセン病患者とその家族を支援するキリスト教団体のことである。
- (10)各地域において、ハンセン病の情報を収集したり、患者やその家族の相談に乗ったりした人のことである。
- (11)大学の医学関係の教授、ハンセン病療養所・官公庁に勤務する医師・看護師が訪問している場合は、「医療機関」ではなく、「学校」「ハンセン病療養所」「官公庁」に含めている。小学生や医学部の学生などが慰問で訪れた場合は、「学校」に含めている。また、ボランティアで歯科診療のために訪れた医師、職業や目的がはっきりしない訪問者は「その他」に含めている。なお、今後の調査で所属機関や目的が判明した場合、表 2 の数字に変更が生じる可能性がある。
- (12)「山陽高女寮」やその落成式のための訪問については、『愛生』の通巻 33 号（第 6 巻第 10・11 合併号：昭和 11 年 11 月）、通巻 114 号（第 13 巻第 11 号：昭和 18 年 11 月）にも記されている。なお、通巻 33 号には約 300 名の来園とあり、『みさを』93 号の人数と相違が見られる。また、後述の卒業生のインタビューにおいては、約 200 名という数字が挙げられている。
- (13)『みさを』93 号の 65 ページには、「講堂は中央の広間を挟んで前後にステージがあり、一方は患者専用、一方は手すりつきで健康者専用と定められていて、ここへは患者は絶対に上がることを禁ぜられています。従って患者の出入口も異なっています」とも記されている。
- (14)2011 年に収録されたもので、高校生がインタビューを行っている。その一部は山陽女子中学校（2013）で見ることができる。なお、2011 年当時、卒業生は 90 代である。

参考文献

- 阿部紀子（2006）「長島愛生園の歴史」『日本の教育・岡山の女子教育－山陽学園大学・山陽学園短期大学 2006 年公開講座－』吉備人出版
- 岡山カトリック教会創立百周年記念事業実行委員会百年史部（1983）『岡山カトリック教会百年史』岡山カトリック教会

- 岡山県ハンセン病問題関連史料調査委員会ハンセン病問題関連史料調査専門員編 (2007)
『長島は語る 岡山県ハンセン病関係資料集・前編』岡山県
- 岡山県ハンセン病問題関連史料調査委員会ハンセン病問題関連史料調査専門員編 (2009)
『長島は語る 岡山県ハンセン病関係資料集・後編』岡山県
- 国立療養所長島愛生園 (1981)『長島愛生園創立 50 周年記念誌』国立療養所長島愛生園
- 山陽高等女学校同窓会 (1937)『みさを 創立 50 周年記念』93 号 山陽高等女学校同窓会
- 山陽女子中学校 (2013)『第 30 回 NHK 杯 全国中学校放送コンテスト岡山県予選出品作品』山陽女子中学校
- 谷川修・大竹章・成田稔編著 (2002)『ハンセン病資料館』高松宮記念ハンセン病資料館運営委員会
- 鳥取県立公文書館県史編さん室 (2008)『鳥取県史ブックレット 2 鳥取県の無らい県運動ーハンセン病の近代史ー』鳥取平版社
- 長島愛生園入園者自治会 (1982)『隔絶の里程ー長島愛生園入園者五十年史ー』日本文教出版
- 長島曙教会 (1996)『約束の日を望みてー長島曙教会創立 65 周年記念誌ー』長島曙教会

分析資料

- 『愛生』愛生日誌 通巻 1 号 (1931) ～122 号 (1944)